

## ご挨拶

私が東京学芸大学に着任してから早いもので25年となります。この間、大学は大きな変化を遂げてきました。思えば着任した頃は牧歌的な雰囲気、以前から続けていた沖縄のフィールド調査を年に3~4回は行かせてもらっていました。加えて、月に1回伊豆半島で調査したり、アフリカのフィールド調査にも3か月弱ほど行かせてもらったりしたこともありました。

今の大学は研究専念期間でも取得しないとこのような野外調査を行うのはなかなか難しい環境になってしまいました。1つには、大学での学習を保障するため、15年ほど前から半期の授業を15コマしっかりと行うことが義務付けられたことがあります。調査で休講となれば補習が必要となりますので何度も休講にすることはできません。そして今の体制もまた来年度から変わります。これまで1時限90分の授業でしたが、来年度からは1時限100分となり、半期14コマの体制となります。また、7コマ1単位のセメスター制授業も導入されます。授業をする方も受ける学生も新しい事態に直面することになり、日々の学習や生活のスタイルがどのようになるか、蓋を開けてみないとわからないというのが正直なところです。

学生の気質も変わってきたと思います。以前はこちらが何を言わずとも卒業生の多くが教員になっていましたし、それを当たり前のように感じていました。ところが今では、教員免許取得が必修の学校教育系であっても教員就職率は6割に満たない状況です。学生の教員志望が低下した原因の1つは、社会の複雑化・多様化に伴って卒業後の選択肢が多様になったことかと思いますが、キャリアの多様化については私個人としてはいいことなのではないかと思っています。もう1つの原因としてよく挙げられるのは教職がブラックな職場だというマスコミ・世間からの評判です。学生のアンケート結果にもブラックな職に就きたくないという意見を見ることができます。知り合いには教職に大きなやりがいを感じている、あるいは充実感があると言っている教員も多いですし、大学としても教職の良さ・魅力を何とか学生にアピールしようとする動きが盛んになっています。また、教員志望が高い受験生を集める努力もしています。このような大学の働きが卒業生の教員就職率として見える結果になるにはもう数年はかかるでしょうか。

大げさに聞こえるかもしれませんが教員養成大学として学芸大の存在意義が問われている現在、教員になりたい学生をもっと手厚くサポートできる大学になることが必要なのだろうと痛感する日々です。同窓会の皆様にも大学から教職の良さを伝えてほしいといったお願いが届くかもしれません。その際にはご協力を賜りますようどうぞよろしくお願いいたします。

(東京学芸大学副学長・生命科学分野教授 狩野賢司)


**オンライン同窓会2022 開催のお知らせ**

2022年11月6日(日曜日)13時~

Zoomでお会いしましょう!

☆☆特別企画 ~現役教授と卒業生のお話~☆☆

原田和雄先生(東京学芸大学) 「感染症に関する教材の開発と実践」  
北澤佑子先生(茨城県立守谷高校)「南極せんせいのメッセージ」



◆昨年初めて開催したオンライン同窓会は国内外から80名近くの参加者があり、大好評でした。今年も魅力たっぷりの同窓会を企画しています。企画講演会では、原田先生にコロナウイルスの話題も含め、感染症に関する教材開発のお話を、北澤先生(2011年卒)に第61次南極地域観測隊同行者として約4ヶ月間活動されて感じたこと、考えたことなどをお話頂きます。企画講演の後は、出身研究室などに別れて懇談会(行き来可能)。現役の先生方の他、藍先生、飯田先生、岡崎先生、北野先生、武田先生、鶴原先生、真山先生、吉野先生等、懐かしい先生方もご参加下さい。友人や研究室の仲間を誘って、是非、オンライン同窓会にご参加下さい!

◆次第: 企画講演会(60分)、先生方の紹介と集合写真撮影(5分)、総会(10分)、グループ懇談会(60分)

◆[参加申込] 11月4日(金)までに、右のQRコード、または同窓会HPから、お申し込み下さい。

同窓会HP <http://seibutsuka.com>

11月5日(土)までに接続案内等をメールアドレス宛にお送りします。

◆[問合せ] [dosokai@seibutsuka.com](mailto:dosokai@seibutsuka.com) (生物科同窓会事務局・小林他)



## ◆令和4年度 紙面講演

(令和3年度同窓会企画講演を元に執筆)

### 学芸大キャンパスの樹木が危うい?!

～大学の歴史と樹木の生長を巡って～

(26期 真山茂樹)



入学願書もらいに初めて学芸大へ来た。かれこれ半世紀も前となる昭和48年(1973)の晩夏の頃である。正門から眼前に広がる見事なケヤキの林を見て「この大学なら来てもいいな」と感じたのを今でも鮮明に覚えている。生物科生であれば、入学前後に同じように感じた人は何人もいるのではなかろうか。学芸大の自慢はなんと言ってもキャンパスの緑の豊かさ。こればかりは、どこの大学にも負けないぞと、昨日の今日まで、当たり前のように思っていた。

ところがである。ここ数年、高木がどんどん無くなってきたのだ。初めのうちは「老木が朽ちて倒れる前に伐採しているのかな」くらいに思っていたのだが、正門の桜並木がほとんど姿を消し、花見の名所であった本部棟前の桜が皆伐されたとなると、居ても立ってもいられない。大学の施設課で話を聞くこととなった。

平成28年(2016)



令和3年(2021)



ここ十年来、大風が吹いたときに何本かの高木が倒れたことは知っていた。大きなケヤキやソメイヨシノが倒れキャンパス内の道路を塞いだり、風になびくはずのシダレヤナギのほとんどが、根本付近から折れているのも間近で眺めていた。しかし、施設課で聞いた話は想像以上のものだった。平成23年から令和2年までの9年間、倒木や幹折れを生じた幹周りが1m以上ある樹木は85本もあるのだ。幹周り1mといえば、樹高はどれも10数メートル以上の高木である。幹周りがそれより小さな木も合わせると、記録された倒木と幹折れの数はなんと216本にもなる。そして、この間に枯死した樹木は81本もあったのだ。



倒れたソメイヨシノ (大学提供)

倒木が駐車している車を凹ましたり、隣家の屋根を壊したり、また、園児が通った数分後に高木の枝が落下し、間一髪セーフ事件が起きたりと、近年は危険木を放置しておけない状況になっていたのである。そこで、大学が樹木医に依頼し、小金井以外の附属学校も含めた東京学芸大学全体の2860本の高木の健康診断を実施した。サクラは幹周り150cm以上のものを、ソナーを使って精密調査し、それ以外の木では、幹周り100cm以上のものを簡易調査した。ソナーを使うと、幹内部の密度分布がパソコンに映し出される。大きな空洞があれば、誰が見たって相当危ない。簡易調査は小さなハンマーを使う。叩いた音で木の内部がわかるのはスイカの選別と同じ原理だが、プロはさすがだ。

調査の結果、26%にあたる690本に伐採判定が下された。小金井地区だけに限ると、緊急伐採が必要な高木は392本で、緊急剪定により危険な枝を取り除く必要があるものは127本となった。

危険でなくとも困った木は随所に存在する。建物に接近して植えられた木がそれで、高木になると葉や枝が建物の屋上などの排水溝を詰まらせ、台風の時に教室に雨漏りが起きたりする。はらはらと舞う落ち葉は晩秋の風情だが、どうだと言わんばかりにテニスコートに降り積もる枯れ葉や、熟れきったイチヨウの実には体育関係者にとっては目の敵だ。

そんなこんなで、ここ3年間でバッサバッサと高木が切られ、大枝が剪定された。キャンパスは至る所で明るくなった、空が広く見えるようになった。でも、



何かもの寂しい。施設課の話では、それでも7割の高木は残りますとのこと。確かに、それもそうだ。近年は木が大きくなりすぎて、過密気味になってきたのも事実である。81本の枯れた木は、陽の光が当たらなくなったことがほとんどの理由なのだから。

元々、学芸大の土地は戦前までは陸軍技術研究所があったところで、当時、木はほとんど生えていなかった。これは昭和17年に軍が民間の農地を買い上げたときに、土地をならしてしまっただけである。昭和21年に米軍が撮影した航空写真を見ると、黒々と見える樹木の場所はキャンパス内ではわずかしかない。



数年間では木の生長は実感できないけれど、現在の樹高を高度計で測定し、過去のデータと比較すると、どの木も大きく育っていることがわかる。人間、長生きしてみるものだ、とつくづく思う。

私が大学生の頃、男子の髪型は長髪というのがほとんどで、肩の辺りまで伸ばしているヤツも結構いたりした。それが、教育実習へ行くようになるとバツサリ切って、風貌の変わりようを笑ったり笑われたり。キャンパス内の樹木も、そんなものかもしれない。長い目で見れば、坊主頭が長髪になり、流行のツーブロックに変わったりして。自然林ではない、人間が植えた樹木の自然環境である。剪定や間伐など、ちゃんとお世話をすることが大切なのだと思う。ただ、樹木の世話には金が掛かるのも、これまた事実。大学がホームページで随時受け付けている寄付は、用途を自然環境維持に限定することもできる。わずかのことしかできないけれど、今までお世話になった恩返しのもりで、たまには寸志をあげたいと思っている。



至る所に様々な木が植えられたのは昭和30年代後半とのこと。時は日本経済の高度成長期、社会の流れに乗って大学にもコンクリートの校舎がどんどん作られるようになった。建築に合わせて植栽予算がつき、ケヤキ、サクラ、クロマツ、ヒマラヤスギ、エンジュなどなど200種以上の多様な樹木が植樹されたのだ。

木は生長する。ケヤキは52年間で7mが22mまでになった。入学時に人の背より少し高かったハリギリは、今では縦横に枝を伸ばし自然館中庭の主である。

### 高木の生長記録

	1968	1974	1978	1998	2008	2020	年
ヒマラヤスギ	9				24	29	m
ハリギリ		2				17	m
ケヤキ	7		13			22	m
メタセコイヤ				10		30	m
センダン					0	12	m

- 1968：大学20周年記念出版用に撮影された写真からの推定値
- 1974：真山が大学入学年に手を挙げた高さより少し高かった記憶
- 1978：真山が大学卒業時に自然科学棟屋上から撮影した写真
- 1998：真山が旧講義棟3号館3外廊下から先端が見えた記憶
- 2008：大学が業者に測定させた値（自然館中庭のセンダンは実生で2008年にはまだ存在していない）
- 2020：真山がレーザー高度計で測定した値





## 矢島 稔さんを偲んで

(8 期 北野日出男)

先輩の矢島稔さん〔昭和 32 年卒 5 期生〕が、昨年より介護施設で療養中のところ今年 4 月 26 日肺炎で亡くなりました。91 歳でした。葬儀は 4 月 29 日に近親者のみで行われました。2022 年 6 月 29 日に神田神保町の『出版クラブホール』で群馬県立ぐんま昆虫の森の筒井 学さんが発起人となって『矢島さんを偲ぶ会』が開催され、生物科同窓会からは私を含め、矢島さんにご縁の深かった青木良 (11 期)、橋本健一 (19 期)、太田由紀夫 (22 期)、橋本建一 (19 期) の各氏が参加いたしました。



1981 年 7 月 18 日  
旧浅草昆虫館前の矢島さん(右)と北野

私が矢島さんと初めてお目にかかったのは、1949 年 6 月 12 日、『新昆虫』という雑誌主催の昆虫談話会と採集会が開催されたときでした。当時、私は埼玉県立豊岡実業高校の 2 年生、矢島さんは都立文京高校の 3 年生だったかと思います。矢島さんはこの頃から昆虫学者になることを夢見ていたようです。理由は、新昆虫発刊 1 周年記念の読者研究論文コンクールで「マダラミズメイガの研究」を發表され、見事入選を果たし、当時のそうそうたる昆虫学者、九州大学の江崎悌三先生、東京農工大学の石井悌先生、東京学芸大学の古川晴男先生がたにお褒めの言葉をいただいたからです。

私も矢島先輩の研究に刺激され、新昆虫創刊 3 周年記念読者研究論文コンクールに『ニホンカブラハバチの営巣場所と土壤水分』と題して応募したところ入選することができました。これをきっかけに二人して昆虫学者への道をかたりあった思い出があります。1950 年 1 月 21 日には、中野区野方にあった矢島家をお訪れ、『東京昆虫同志会』に入会申し込みをしています。その後、私事で恐縮ですが、私は、家の経済的事情で大学進学を諦めざるを得ず、銀行に就職することになります (当時の東京銀行日本橋本店外国為替課、1951-1955 年)。しかし、どうしても昆虫学への道が諦めきれず、悶々とした日々をすごしていましたが、私にとって本当に幸いなことに、1955 年銀行が海外支店を拡張するために、国内の支店を削減することになり、有利な条件で希望退職者を募りました。即、私は脱サラして退職金を元に、大学への進学に挑戦しました。当時、自宅は、北多摩郡小平町小川にありましたから通学可能で昆虫学者のおられる大学として東京学芸大学を選び受験したところ、1956 年 4 月 7 日付で乙類 (中等教育課程) 理科専攻 (生物科) 合格の通知をもらいました。当時 学芸大学は 3、4 年生が通学する世田谷分校と 1、2 年生が通学する小金井分校にわかれていました。1956 年 4 月 27 日世田谷分校で生物科所属学生を主体とした生物科会の新入生歓迎会があり、この時はじめて古川先生にお目にかかり、先生の研究室に所属したい旨お話したところ快諾を得ました。また、当時 4 年生で生物科会の会長をされていた矢島さんにお会いして再会を喜び合ったものです。

1956 年頃の矢島さんは古川研究室で昆虫学分野での研究に携わりたかったようでしたが、古川先生のご希望により昆虫をテーマとした生態記録映画の制作に携わり、撮影場所として豊島園内に昆虫館の建設を計画し、その設立にあたっていました。そして、1957 年春に豊島園昆虫館を開設しています。卒業後、この分野のお仕事に精進されておられたところ、1961 年、当時多摩動物公園園長であった林寿郎園長の希望を受け、公園内に現在の昆虫園の土台となる『昆虫飼育試験室』を開設されました。

話はそれますが、今、私の手元に、『いんせくとびあ 会誌 虫の知らせ 1978 第 1 号』発行日 1978 年 3 月 10 日、編集兼発行人 矢島稔という冊子があります。当時 (1972 年) 私は学芸大学から京都大学理学部動物学教室に転任していましたので矢島さんがわざわざ宇治の自宅まで送ってくださった冊子です。この冊子の 1 ページ目に矢島さんが『いんせくとびあのあゆみ』を書いておられます。矢島さんは、当時、日野市東豊田のご自宅を、月に一度日を決めて解放し、「話している内に、話を聞いている内にお互いを高め合えたらすばらしいと思います。」

というサロン風の談話会をつくりました。談話会が始まったのは1971年3月からでした。会が10回目になった頃、「一体、この会は何という会ですか?」と言われて困ったそうです。参加者にいろいろと考えてもらい、投票で決まったのが橋本健一君が提案した『インセクトピア』でした。森田善之さんが「ひらがな」にした方がよいというので『いんせくとぴあ』となり(1972年2月)、会誌名は『虫の知らせ』となりました。『虫の知らせ』第1号に記録されている第1回から第56回までの話題提供者とテーマの記録は貴重なものです。私も第4回(1972年6月25日)に『寄生のメカニズム』と題して話題提供をしています。当時、お家を解放して、様々なおもてなしをしてくださった奥様の和子様(第5期)が1995年に亡くなられたことは、本当に痛ましく、お気の毒なことでした。



豊島園昆虫館(2020年豊島園閉園と共に閉館)

矢島さんはその後、上野動物園水族館館長(1978-1984)、多摩動物公園園長(1987-1990年)などを歴任され、1990年7月には、全国にある23館の昆虫館が加盟する全国昆虫施設連絡協議会(全昆連)を創設され、初代の会長を務め、お亡くなりになる今年まで顧問としてこの分野の発展に力を尽くして来られました。毎年、総会と全国昆虫館員の研究発表が行われ、優れた発表には、『矢島賞』が授与され、その内容は、「昆虫園研究」という機関誌に報告されています。私も矢島さんの依頼を受け、微力ながら外部委員としておつたいでいます。

1999年4月には、矢島さんの長い夢であった『野外で昆虫を捕りながら、遊び、かつ、学ぶことのできる空間』である群馬県立ぐんま昆虫の森が設立され、1999年4月から2013年3月まで園長を務め、亡くなられる今年まで、顧問として名誉園長の責務を果たしておられました。

本当に長い間ご苦勞様でした。そして、ありがとうございました。 合掌。



多摩動物公園昆虫生態園



2017年、学長から「東京学芸大学名誉校友記」が授与されました。

## ◆紙面同窓会

●卒業して62年になります。1・2年時は小金井、3・4年時は世田谷の時代です。畑に囲まれた木造平屋から住宅に囲まれた鉄筋3階建ての校舎へ。余りの違いにビックリ。靴がドロだらけにならずホッとしました。古川晴男研究室で、後に教授になられた北野日出男さんとご一緒でした。北野さんはハチの研究で、私はアブの生態を観察して居りました。

楽しく、時に厳しく学びあったころをなつかしく思い出しています。【T. K. : 昭和35年卒 8期】

●私は9期生で、戦後中学校の生徒が一番多くなった頃に中学校教員になり、男性も女性も結婚後も教職に就いて活動された方が多かったと思う。都研が港区中央図書館の場所から目黒へ新築され、私は研修会によく参加し、後に指導主事になってその活動に参加しました。校長時代は全中理役員をし、退職後は全中理OB会に参加し、現在も会報担当として活動しています。私達の後に続く方が大勢出て下さることを待っています。

【T. K. : 昭和36年卒 9期】

●卒後60年、思い出すのは草原の木造校舎。陸軍兵器研究所の跡地だったとか。小学校の先生になりたくて入った大学だったけど、とても楽しい学習環境でした。特に生物を専攻したのは、幸い、法師温泉に泊まって群馬の山の植物、下田の実験場で海の生物なども。私の就職期の事情で小学校には行けなかったけれど、ろう教育中高専19年、中学12年、あと7年は中学の相談学級として勤めることができました。退職20年、海外旅行を楽しんでいます。【Y. N(Y). : 昭和36年卒 9期】

●82才です。学大の雰囲気も、ずい分当時と変わったことでしょう。小金井公園での集い、学大小学生と昆虫とり〜、なつかしいです。ちょうど自然館ができた時でした。これからの方々はますます悪化する環境を何とか守り、保全することに力を入れてほしいです。これからの子どものためにも。井上巖先生の研究室で、ハリガネムシ(カマキリの寄生虫)の研究のお手伝いをしていました。日野市で教員をしていました。

【Y. S(I). : 昭和37年卒 10期】

●私は教職も十分に経験せず、子育てのみの母親でしたので、一国民としての生活のみでした。

今この年になり、学生時代に勉強した事を思い出します。勉強したことは楽しかったです。

【K. A(K). : 昭和38年卒 11期】

●学生時代の思い出は、まず実習で行った山々や海、そして生物部で行った金峰山や甲武信岳の登山です。その延長が卒業後は、富士山、北岳、間の岳、仙丈岳等々絶景や高山植物を求め自然

に親しんできました。そのためか40代後半あたりから、じわじわと膝が痛み出し、今や三本脚でヨタヨタと暮らしております。健康のため声楽を楽しんでおります。余命はあと何年なのでしょう???

【F. S. : 昭和38年卒 11期】

●近くの山を歩きながら、楽しく暮らしています。

【K. M(N). 和子: 昭和39年卒 12期】

●この数年コロナ禍での生活は、なんとも窮屈な生活を送っております。私に関係している老人会などの会合は現在中止の状態です。本来なら久しぶりに学大のキャンパスにも行きたいと思うこの頃ですが、残念です。

最近、学生時代の思いを残しながら断捨離を心掛けておりますが、中々進みません。コロナ以来イライラする日が多く成りました。皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

【I. O. : 昭和39年卒 12期】

●川崎研究室で有意義な4年間を過ごした事を思い出しました。植物に詳しい川崎先生や仲間と一緒に大学の周辺、高尾山や近くの山、海岸へ行きました。そして、いろいろな植物の名前を教えてくださいました。今でも出かけた時、まわりの植物を眺めるのが好きです。知っている植物があると嬉しくなります。ですから、植物図鑑が手離せません。

【K. W(Y). : 昭和39年卒 12期】

●主人(石田明靖 生物科13期卒)が亡くなって14年になろうとしています。だから野山に出かけることも少なくなり、植物の名前もあやしくなってきました。淋しいです。

でも、元気に生きていますよ。色々な会に参加して活動しています。新しい友達も増えました。コロナの中でも、コーヒ一片手におしゃべりをしています。このような近況ですが、岐阜にぜひ遊びにいらして下さい。【Y. I(K). : 昭和40年卒 13期】

●大学を卒業して、早、57年が過ぎようとしています。人生、紆余曲折、いろいろありましたが、「今が一番幸せ!」。只今は、近くの小学校で1日1時間二年生の算数(少人数)を、また、週3時間の補習授業を担当しています。その他、ほぼ毎日、水泳、そして、時々趣味の絵を描いています。

コロナにめげず、前向きに、これからも生きていそうですね。

【T. K(I). : 昭和41年卒 14期】

●大学を卒業してすでに50年が過ぎ去りました。元気で暮らしております。同窓会の発展を祈念します。

【H. F. : 昭和44年院卒 大15期】



## 2021 年度卒業論文発表会のテーマ紹介

- |  |  |
|--|--|
| <p>(1) 渡部 太基 「グッピーの雌の配偶者選好性に対する遺伝的影響」(狩野研)</p> <p>(2) 長谷川 真央「チェリーバルブの他個体に対する選好性に親しさが与える影響」(狩野研)</p> <p>(3) 山崎 璃央「グッピーの色彩に対する学習」(狩野研)</p> <p>(4) 橋本 和真「自家不和合性植物の送粉と繁殖：都市部と山間部集団の比較」(堂園研)</p> <p>(5) 藤田 竜輔「リボスイッチのバイオセンサー化に向けたデザイン法の確立」(原田研)</p> <p>(6) 山本 和奏 「大腸菌レポーター・アッセイを用いたλN アンチターミネーションにおいて重要な宿主因子 NusA タンパク質のアミノ酸の解析」(原田研)</p> <p>(7) 植村 真勝「H-19B N アンチターミネーションにおけるNタンパク質およびnut領域の役割の解析」(原田研)</p> <p>(8) 石坂 あゆみ「小笠原諸島固有種ムニンヒサカキとその近縁種の花の比較解剖学的研究」(小栗研)</p> <p>(9) 井ノ口 詩織「日本列島に広域分布するアメイロアリ(アリ科:ヤマアリ亜科:アメイロアリ属)の地理的遺伝構造の解明」(小栗研)</p> <p>(10) 亀井 遥「小笠原諸島固有種シマギョクシン(アカネ科)の花の性表現に関する解剖学的研究」(小栗研)</p> <p>(11) 黒田 舞衣「日本産タマヤスデ属(倍脚綱:タマヤスデ目:タマヤスデ科)の系統分類学的研究」(小栗研)</p> <p>(12) 齋藤 有紗「ハワイ諸島固有種アオガンピ属植物(ジンチョウゲ科)の花の性表現に関する解剖学的研究」(小栗研)</p> <p>(13) 荒木 葵「琉球列島の林床棲ハエトリグモ類の種相の解明」(小栗研)</p> <p>(14) 菅原 峻太「小笠原諸島固有種シマムロ(ヒノキ科)の形態的多様性とその要因の解明」(小栗研)</p> <p>(15) 永田 洋介「単一分離輸卵管筋細胞のリズム収縮発現におけるミトコンドリアの関与」(吉野研)</p> | <p>(16) 工藤 亘「フタホシコオロギ側輸卵管の自動運動におけるミトコンドリアのL型Ca<sup>2+</sup>チャネル及びBKチャネルへの関与」(吉野研)</p> <p>(17) 染谷 早紀「側輸卵管に見られる縦走筋と輪走筋に対するモノアミン系神経修飾物質オクトパミン及びセロトニンの作用」(吉野研)</p> <p>(18) 横溝 陸「単一ケニオン細胞の持つ潜在的学習・記憶能力の解明—電位依存性Na<sup>+</sup>/Ca<sup>2+</sup>チャネルに対する古典的条件付け刺激の効果—」(吉野研)</p> <p>(19) 田中 庸「単一ケニオン細胞の持つ潜在的学習・記憶能力の解明—アセチルコリン応答に対する古典的条件付け刺激の効果—」(吉野研)</p> <p>(20) 伊藤 勇希「セイヨウアカネ(<i>Rubia tinctorum</i>)の茎葉部におけるアントラキノン系色素合成と稜形成に及ぼす光の影響の波長特異性」(中西研)</p> <p>(21) 岡田 薫「低温環境下におけるミドリゾウリムシ(<i>Paramecium bursaria</i>)の共生と共生藻数について」(中西研)</p> <p>(22) 三部 航介「アサガオ(<i>Ipomoea nil</i>)における受粉が花寿命に及ぼす影響」(中西研)</p> <p>(23) 数野 優「放散虫 <i>Actinomma</i> sp. に共生するプラシノ藻の微細構造観察及び分子系統解析」(湯浅研)</p> <p>(24) 松井 聡汰「東シナ海から得られた <i>Neoparamoeba</i> とそれに共生する <i>Perkinsela</i> 類の分子系統解析」(湯浅研)</p> <p>(25) 伊藤 魁文「渦鞭毛藻 <i>Zooxanthella nutricula</i> の細胞内共生時と自由生活時における形態変化について」(湯浅研)</p> <p>(26) 鈴木 皓大「光合成に関する誤概念の修正方法の検討」(湯浅研)</p> <p>(27) 塚原 郁実「Class I CCEにおける内生 IAA 量及び液胞膜上のV-ATPase活性の役割の解明」(Ferjani 研)</p> <p>(28) 明田 菜々穂「花茎の構造的整合性維持を司る因子群に焦点をおいた組織形態学的解析」(Ferjani 研)</p> |
|--|--|

## ◆大学での出来事

大学は令和5年、創基150年の大きな節目を迎えます。これを記念して令和5年秋、大学主催の「創基150周年記念式典」が開催予定です。これと呼応するように、大学は今年、文科省から教員養成のあり方の変革と他大学を牽引する使命を担う「フラッグシップ大学」の指定を受けました。令和5年度は、また学部の改組が行われる年となります。教育学部の初等教育教員養成課程（A類）、中等教育教員養成課程（B類）、特別支援教育教員養成課程（C類）、養護教育教員養成課程（D類）の4課程が1つになり「学校教育教員養成課程」となります。一方、規模は小さくなりましたが教員免許の取得を必須としない「教育支援課程」（旧教養系）がこれと並置されます。

大学は新型コロナウイルス収束の目途が立たない中、感染防止

対策の徹底を前提として、原則、対面授業を優先する方針に切り替えました。そのためキャンパスも幾分賑わいを見せ始めています。そんな中、今年の卒業研究発表会が2月5日（土）～6日（日）に行われました。昨年に引き続き今年もZoomによるオンラインで行われました。7研究室28名の学生さんが、研究室単位で口頭発表し、発表ごとに、先生と学生さんからの質問に答える質疑応答が活発になされました。大学生活をコロナに翻弄されながらも、卒研によって粘り強く学び、身につけた見識や技能は、困難に取り組む力となると期待されます。学芸大学はこれからも時代に即応した改革が進んでいくと思われませんが、生物科で行われている卒研の取り組みは、今後も継続・発展することを願ってやみません。（吉野 正巳）

## ◆2021年度 総会の報告

2021年度総会が昨年11月7日（日）午後2時から2時30分にオンラインで開催されました。つぎの議案について報告、審議がなされ、承認もしくは議決されました。

- (1) 2021年度活動報告
- (2) 会計報告（2020年度決算報告、2021年度中間決算報告、会計監査報告）

(3) 2022年度会計予算案

(4) 2022年度活動計画

※2021年度から役員会の新たな形態としてZoom会議やメール役員会による評決法が取り入れられた。

※企画講演会はオンライン同窓会の特別企画として実施された。（北野日出男氏・真山茂樹氏）

※2022年度は同窓会ニュースの紙面充実を含め、同窓会のさらなる活性化を目指す。

## ◆卒論発表会のお知らせ

令和4年度の卒業論文発表会及び修論審査会は、2023年2月に行われる予定です。例年は一般公開なのでどなたでも参加できますが、昨年度はコロナ禍でオンライン開催となり、卒業生の皆様にはお伝え出来ま

せんでした。今年度も、どのような形になるか未定です。日時と場所、実施形態については、来年1月に同窓会のホームページでお知らせします。

## ◆会費納入のお願い

生物科同窓会は皆様からの会費で運営しております。今回は、令和3年度～令和6年度4年分の会費として、2,500円をご送金ください。用紙は郵便局に備え付けの払込取扱票をご利用ください。必要事項を記入し、ATMの場合152円、窓口の場合203円の手数料をご負担ください。

・口座番号：00170-1-21830

・加入者名：東京学芸大学生物科同窓会

連絡先 電話/FAX 042-329-7521

E-mail: myoshi@u-gakugei.ac.jp

（会計：吉野 正巳）

## ◆編集後記

本誌の編集には、毎年多くの方のご支援ご協力をいただき、有難く厚く御礼申し上げます。今回は8期から15期までの卒業生の方々に特にお願いして「紙面同窓会」にご寄稿いただきましたが、その他の期の方々も是非ご寄稿くださいますようお願い申し上げます。

同窓の方々からのお便りはいつでも受け付けております。紙面充実のため、体験談や研究成果を誌上発表してもよいという方、また、そのよう方の情報をいただくと幸いです。分かる範囲で結構ですから、氏名・卒業年・期・出身研究室名などを添えて、ニュース編集担当までお知らせ下さい。

送付先: seibutu34@gmail.com

しばらく待っても受領メールがない場合は、ご面倒ですが、その旨事務局までご連絡ください。

事務局: dosokai@seibutsuka.com

（編集委員長：横山 正）